

3/14/10 [放蕩息子の兄] ルカ15:1-3、11b-32

放蕩息子の譬えはイエスの譬え話の中でも良く知られたものです。しかし、多くの場合、前半の部分を読むだけに終わってしまいます。しかし、この物語には後半の部分があるのです。後半の部分には放蕩息子の兄が登場します。今日はその兄の物語をたどってみたいと思います。

兄は夕方農作業から帰ってきます。音楽が奏でられ、おいしい料理の匂いがします。特別な日でもないのに何故だろうと不思議に思う兄は、その理由を聞いて激怒します。

放蕩三昧を重ねてぼろぼろになって帰ってきた弟を、父親は拒絶するどころか、喜んで迎え入れ、普段は食べない高価な料理を作ってお祝いしているというのです。

弟が身を持ち崩している間、汗水たらして働いてきた兄の立場からすれば、これは余りにも不公平です。彼は怒って家に入ろうとしません。ディナー・パーティーをしてもらうべきなのは自分です。弟は勘当されてしかるべきです。

そう言って抗議する兄を父親は優しく諭します。「よく聞いてくれ。お前の弟はいなくなっていたのに見つかったのだ。死んでいたのに生き返ったのだ。お祝いするのは当然ではないか。どうか家に入ってわたしと一緒に祝ってやってくれ。」この父親の言葉で物語は終わります。

この放蕩息子の兄の物語は私たちに何を語りかけているのでしょうか。第1。父親とは神のことです。第2。その慈しみは深く、絶えることはありません。神は悔い改める人を赦されるのです。第3。この限りなく、絶対的で無条件な愛は、人間の理屈に合いません。それは真面目人間を自認する者から見ると余りにも不公平です。

そして第4。兄は私たちです。私たちは、神を私たちの常識や理屈の枠に押し込めようとします。私たちは神の思いではなく、自分の思いを中心に考えてしまいます。「弟を勘当してください。私のためにこそディナー・パーティーを開いてください。」この兄の言葉は私たちの言葉でもあります。

しかし、ここで忘れてならない点があります。父親は意固地で頑固な兄をも愛して止まないのです。兄が背を向けようとも、家に入ろうとせずによいようとも、辛抱強く彼を説得し続けるのです。神の私たちへの慈しみと忍耐が無限であることをそれは意味しています。

そしてもう一つ、読み落としてならないことがあります。皆さんは、お気づきになったでしょうか。

それは、この物語に結末がないことです。果たして兄は意地を張り続け、家に入ることを拒みつづけたでしょうか。それとも、父親の説得に応じて、ディナー・パーティーに参加したでしょうか。その結末は書いてありません。

何故でしょうか。イエスは言うのです。結末はあなたがか付けなさい。これはあなたの問題なのだ。あなたは神の招きに応えるだろうか。それとも背を向け続けるだろうか。

このイエスの問いに応じて、正しい結末を付けようではありませんか。父親の招きに応えようではありませんか。神は私たちを説得し、待っておられるのです。家の門は閉じられることなく、ディナー・パーティーは続いているのです。